

化学物質の影響を考えることの意味

上島 通浩 (名古屋市立大学大学院 医学研究科環境労働衛生学分野 教授)

私たちの身の回りには多くの化学物質が溢れています。化学物質というと(1)人類が目的をもって生み出した合成化学物質、をイメージする方が多いと思いますが、この他にも(2)人間の活動により非意図的に生成される化学物質、(3)自然界にもともと存在する化学物質、(4)自然がつくり出す化学物質があります。例を挙げれば、(1)の化学物質にはプラスチック製品の原料、農薬、食品添加物、合成洗剤などが、(2)には燃焼により生じる窒素酸化物やダイオキシンなどが、(3)には土壌中の鉛やヒ素などが、(4)にはカビが作り出す毒(アフラトキシン)や、二枚貝が持つことのある貝毒などがあります。これらの化学物質は、環境、人や社会にさまざまな影響を与えています。

このうち、日常生活で健康との関わりについて話題になりやすいのは、(1)や(2)の化学物質です。職業性中毒や公害病が社会問題になった歴史があり、環境汚染による健康不安は古くて新しい問題です。測定技術が進歩した今世紀は、研究が進むにつれて、かつてはよくわからなかった微量の化学物質による影響が注目される時代です。

私たちがめざすのは、化学物質の影響を受けやすい子どもや高感受性の方々を含め、すべての人が安全・安心を感じつつ質の高い生活を送ることができる社会です。そのためには、化学物質のよりよい管理の仕方を考え、法的規制を含めよりよい社会の仕組みを作っていかなければなりません。

レジ袋の削減にみられるように、社会としての仕組み作りに加え、個人レベルでの行動変容も求められます。そして、適切な管理のあり方を考える際には、「交通事故にあうリスク」や「維持費がかかること」を承知で「移動の手段を確保する」目的で自家用車を保有するように、個人や社会のさまざまな側面を複眼的に眺め、「リスク」と「便益」を天秤にかけて考える視点が必要です。(1)の合成化学物質には開発された理由があり、ある側面の悪影響を防ぐために使用をやめたり代替品に切り替えたりしたときに、想定しなかった困った事態が生じた、ということも私たちの社会は経験しています。個人レベルでも、毎日の食生活で合成化学物質の含有のみに注目するようになったら、必要な栄養素の取り方を意識しなくなるかもしれません。

化学物質がもたらす「便益」と「リスク」のバランスの取り方は、時により、また、人によって順番や正解が異なるむずかしい問題です。また、健康保持の側面では(1)、(2)に加え、(3)や(4)の化学物質にも目を向ける必要があります。化学物質の問題を考えることは、私たちの生き方や社会を考えることでもあります。専門家の見解でもあっても、それが絶対に正しいものとはかぎりません。読者の皆様が本号の内容を含めさまざまな情報や考えに触れ、ご自身の考えを深めていただければ幸いです。